

西郷隆盛

風の巻

林房雄



西郷隆盛 第九卷

風の巻

書名	著者	定価	発行所	発行者	発行日	印刷所	製本所	製函所
西郷隆盛 風の巻	林房雄	三八〇円	徳間書店 東京都港区芝新橋四の一〇	徳間康快	昭和四十年一月十五日 初刷	図書印刷株式会社	大口製本印刷株式会社	文京紙器株式会社

乱丁、落丁ありましたらおとりかえいたします

林房雄©

林房雄

西郷隆盛

第九卷 風の巻

西
鄉
隆
盛
／
目
次

風の巻 * * * * * 目次

第一章 朱欒の実 * * * * * 9

第二章 冬晴 * * * * * 30

第三章 荒魂 * * * * * 48

第四章 煙は薄し * * * * * 68

第五章 秘策 * * * * * 92

第六章 楠公社 * * * * * 119

第七章 同憂人 * * * * * 137

第八章	經船	*	*	*	*	163
第九章	編笠	*	*	*	*	187
第十章	直言	*	*	*	*	198
	年表	*	*	*	*	221

挿絵・山崎百々雄／装幀・上口睦人

風

の

巻

第一章 朱樂の実

堀の外の夕闇の道を、歌って通る声が聞えた。

城下下福良、森山新蔵の屋敷の朱樂の実が、まるまるとふくらみはじめた秋のはじめである。浮かれ歩きの若侍が夕暮の道を歌って通るのにふさわしい季節であるが、戯れ歌めかした歌の調子にも文句にも毒があった。

へ一つとせ、人もなげなる誠忠組

二つとせ、二言目には御直文

主の新蔵は奥庭を見晴らす離れの書斎で、夕明りの残った縁側近く机をすすめて、「靈能真柱」の写本を読んでいたが、歌声を聞くと、またかと言いたげな顔をして、煙草盆を引きよせた。眉はひそめたが、たいして気にはとめていない態度であつた。

廊下をふみ鳴らして息子の新五左衛門があらわれた。十八歳であるが、もう見上げるほど背がのびて、筋骨もたくましく、皮膚の白い、眉のすずしい美少年であつた。歌声を聞きつけてとび出して来

たらしく、右手に朱鞘の大刀をわしづかみにし、怒りに頬を真つ赤にし、肩で息をしながら、

「父上ー」

と叫んだ。今にも庭に駆け出しそうな勢いであつた。

新蔵は火をつけた煙草を唇のあたりで止めて、静かに、

「新五、やめとけ。毎度のことだ」

堀の外の歌は、誠忠組と森山親子を落首めいたあくどい調子であてこすった戯れ歌なのである。誰が作つたか、この夏のはじめ頃から、城下の裏小路の夕闇にまぎれて歌いまわされ、誠忠組の若侍達の疳をたかぶらせる。

森山新蔵はいわゆる「成上り者」である。代々の素封家で、鹿児島城下でも指折りの富豪であつて、士分に取立てられたのもすでに数代前のことであるが、階級觀念のきひしい薩摩では、いつまでも差別あつかいをされるのである。父子ともに剣道は葉丸流の免許をうけ、特に父の新蔵は棠園とうえんと号し、闇齋あんさい学にやしなわれ、平田学にも造詣の深い学者であつて、武士の資格に欠くところはないのであるが、城下士からは一人前にあつかわれぬ。敵だけではなく、同志でさえも、いつまでもこの差別觀にこだわっている者が少くない。その点は、美玉三平、伊牟田尚平いむた しょうへい、是枝柳右衛門などの「田舎士」(百姓、町人出身の郷士)が、未だにときどき「城下士」の同志とは同席さえも許されぬような目にあうのと同様である。

たとえば、有村俊齋なども、はじめは同志の者が森山父子と対等につきあうことをひどく嫌つたものである。森山からときどき金銭上の援助を受けている同志の者がいると聞いてかつとなり、ある日、



木刀をさげて、森山新蔵を試しに行った。まず、
武術から始めて、学問の話に及び、どちらも相当
なものだと認めて、初めて付きあうようになった。
もつとも、俊斎ほどのあわて者でない伊地知正
治や西郷吉之助や大久保市蔵は、最初から森山の
人物を見ぬいて、分けへだてはしなかった。富豪
の家に生れながら懦弱遊蕩の氣に染まず、齢四十
を過ぎてなお勤皇一筋の道に生き抜こうとする人
物に対しては、身分も家柄もない同志と同志との
関係があるばかりだという考え方が、近ごろでは、
誠忠組の一派の間だけにはひろまって来た。

森山新蔵も、誠忠組のためには、いっさいをか
えりみず、先祖代々の家産を傾けてまで誠意をつ
くしている。昨春秋の突出計画の際には、資金と
輜重のいっさいを引受け、大船二艘を新造して大
阪直行の用にあて、そのみか、息子の新五左衛
門をうながして父子ともに死士の血盟に加わった。
それ以来、同志の間では森山父子をかるんずる者

はまったくなくなり、その名は藩外にまで聞えて、長州に白石正一郎、兼作兄弟あり、薩摩に森山父子ありと言われるほどになった。白石家も森山家も代々の素封家で、どちらも勤皇党の有力な保護者であり、援助者である。だからそれだけ、森山一家は最近になって、反対派の強い憎しみを受けるようになった。激派の金穴とにらんで、有ること無きことを藩庁に密告して罪におとそうとはかる者があり、中には暗殺をもくろむ者さえ出て来たという噂さえとんでいる。誠忠組には敵が多いので、森山家にもそれだけ敵が多くなる。塀の外で戯れ歌を歌うのも島津豊後の党か、それとも島津左衛門の一派か、いずれそうした一味の者のいやがらせにちがいがなかった。

「犬の遠吠えだよ、新五。刀を抜くまでもなからう。もっとましなものを斬りに行くときまで、お前の刀は抜かずおくがいいぞ」

「と申しても、父上、吠えつく犬どもには、ときどき石をくらわしてやらねば癖になります」
一度遠ざかった歌声がまた近づいて来た。

へ七つとせ、成上りたる森山の

八つとせ、屋敷の中で飲め歌え

一人ではなかった。酒気を装った二、三人の乱れた足音であった。

「うぬっ、犬め！」

と叫んで、新五左衛門が腰を浮かせかけたとき、同じく塀の外で、

「この馬鹿者めが！」

弓の折れで檜の板を叩いたとでもいいたい気合いのこもった声が、朱樂の下枝にはねかえった。声と同時に歌声はびたりとやみ、ばたばたと逃げ出す草履の音が乱れた。

*

気を抜かれた形で、新蔵と新五左衛門が顔を見合せていると、土蔵の横の通用門ががらりと開いて、肩幅の広い、若侍の姿がぬつと入って来た。

「誰だっ！」

新五左衛門が叫んだ。この門の開け方を知っているのは同志の者ときまっているが、時が時であったので、思わず声が高くなった。

「僕だ。柴山だ」

落着いた返事であった。

「先生でしたか。失礼いたしました。さあどうぞ」

新五左衛門は立上って縁側まで出迎えた。

柴山愛次郎はまだ二十五歳の若さであるが、造士館の訓導師の中ではもう古参で、おそろしく無口で、厳格な教師としてこわがられている。造士館に出る時にはちゃんとした服装をしているが、家にいる時には一年中一枚の単衣ひとえを着たつきりで、夏も蚊帳かやをつらず、冬も綿の入った夜具は用いず、眠くなれば机によって眠り、学問と武道のほかには何の道楽もない石部金吉の標本のような先生だと生

徒の間に評判が高い。「誠忠組」の中でも、有馬新七、田中謙助、橋口壮介などと並んで、激派中の激派、潔癖家中の潔癖家として、一部の者にはけむたがられている人物である。

「御免」

柴山は座敷に通じ、かたちを正して森山父子に挨拶し、やがて苦々しげな口調で、「いつまでたっても、馬鹿者どもの根は絶えませんな」

「はあ、先生の一喝が聞えなかったら、私ごとび出すところでした」

と、新五が答えた。「われわれ親子の悪口だけなら我慢しますが、近ごろは誠忠組の悪口までいうようになりました」

「馬鹿者は誠忠組の中にもおります」

「えっ」

「近ごろはますます増えてきた。このままでは誠忠組もいずれ自滅だ」

はき捨てるように言つて、柴山愛次郎はそのまま口をつぐんでしまった。怒ると黙りこむのがこの人の癖である。

柴山の意味は森山父子にもよくわかった。桜田事変の後、為すこともない数カ月がずるずるとたつてしまつて、倦怠の気が同志の間にみなぎりはじめている。

大老を殺された幕府はかならず大強圧手段に出て、水戸に対してのみならず、朝廷に対し奉つても不敬の暴挙を働くにちがいない。そうなれば、水戸の老公は馬を陣頭に進め、越前の松平春嶽も起ち、長州、土佐もこれに応じて、天下は大動乱になるであろう、という予想はまったく裏切られた。幕府

は弱腰な宥和政策に出て、公武一和を標語とし、和宮御降下を願ひ出て、狡猾な裏面工作によつて公卿を懐柔し、越前、福岡、薩摩、長州等の雄藩に対しては、いろいろと御機嫌とりの手をうって来た。この宥和策は成功して、天下には何事も起らず、万延元年も後半期に入ってしまった。

その点で、大久保市蔵も有馬新七も柴山愛次郎も予想をあやまったのである。つまり、久光の先見が正しかったということになり、出兵は目下のところ無期延期の形になってしまった。さらに案外なのは、藩政をにぎっている島津左衛門一派の態度であつた。斉彬直系の進取決断派だと期待されていたにもかかわらず、まったくの保守自重派であつて、何かにつけて誠忠組をおさえにかかるのみならず、久光をも牽制して、中央進出の望みを捨てさせようとかかつてゐる。お家大切の固陋因循一点張り、尊王の大義も救国の大策も二の次、三の次であると、昂奮した若侍たちの目には映つた。

やり場のない憤懣が自棄と粗暴を生む。死を覚悟した突出計画の出鼻をくじかれた上に、鋏で枝葉を刈り取るような意地のわるい圧迫政策に出られて、氣をくさらせ、さかんな血氣のはけ口を失い、常軌を逸した行動に出る若侍もできはじめた。酒の勢いを借りて、放談高歌するのはまあいい方である。有志氣どりの異様な風態で盛り場をねり歩き、反対派の若侍に喧嘩を売り、重役の屋敷に石を投げ、検察の下役人と衝突するなど、世間の指弾に値する行動がめだつて来た。「誠忠組」という名はいつの間にか城下の通り言葉の一つになったが、決して讃め言葉ではなく、とびあがり者で、乱暴者で、身のほど知らずの野心家ぞろいと、そんな戯れ歌まで出来るようになった。それも無理からぬと思える行動の乱れが、実際に同志の間に発生しているのである。潔癖家の柴山愛次郎が怒るのも無理はなかつた。